モニター意見から

本学広報委員会は、大学構成員のご意見を広く求めるために、23期第4号からモニター制度を実施しております。

今期は、各広報委員から推薦の、教官十三名、事務系職員十三名、学生十三名の計三十九名のほか、名誉教授やマスコミ関係、地元の方々など合計五十六名に委嘱しました。

モニターからは貴重な意見が寄せられ、可能な限り誌面に反映させておりますが、今回は、マスコミ関係のモニターからいただいた意見を紹介します。

☆第三号に関する印象や感想など

三号を手にして感慨ひとしおでした。三十数年も前に学生の端くれであった身には想像の外とも言うべきで、我が母校も変わったものだと言う印象です。つまり、予想外の出来で、関係者の労苦が忍ばれます。

本号の特集「広島大学の情報化―現状と問題点―」や「いじめを考える(その二)」などはタイムリーであり、また是非物でもあります。

全体の印象はやや堅い。学生、教職員が読んでくれなければ意味がないことを考えると、もう少し柔らかくする工夫が欲しい。それは文章、写真、イラスト、レイアウト然り。「アカデミズムの広大だから仕方がない」という発想はこの際返上し、あそび、ゆとり心を注入したい。

具体的には、文章は全体的に柔らかく書く努力をしてください、というに尽きます。また、漢字複合語が多すぎはしないか、と思いました。これはレイアウトの詰め込み過多にも通ずるのではないでしょうか。また、広報誌であるのに、文型が旧態依然とした「論文調」であるのが見受けられます。「はじめに」「おわりに」のスタイルは、一見(内容を読まないで)して、読む気を疎外するように感じます。これだけでもやめたら、ずいぶん雰囲気が変わると思いますが…。

次いで見出しです。例えば、特集の「広島大学の情報化―現状と問題点―」は、無味乾燥、無機質です。読者たる学生や教職員に一目で関心を抱かせるには、現状と問題点を具体的に見出しにうたうべきだと思います。そうすれば「見出しにも人の暖かさ」が滲み出ます。それが読者を引きつけるフェロモンです。その意味では「無精者の情報化」のタイトルはまずまずです。しかし、中見出しの「情報教育と情報発信の重要性」という漢字ばかりの字面には、人の血の通いを感じません。

写真について。マシーンだけの4ページの写真はその典型でしょう。絶対に「人」を入れるべきです。そうすれば、コンピュータも人の営みであり、暖かさがあることが紙面に漂います(その観点から見ると、筆者の顔写真はすべて欲しい)。また、学長インタビューの写真の扱いは一考を要すると言えます。狙いは学長ですから、その表情がクローズアップされるようにトリミングすべきです。学生たちが「学長の頭はこんなに禿げているのか」と興味を持ってくれれば成功です。

イラストについて。18ページの図解などをふんだんに取り入れてほしい。ビジュアルにと言うのが漫画世代の学生に受けることは確かです。特にややこしい話になると、必ず図解をつけることにしてほしい。コンピュータで簡単に描ける時代ですから。

レイアウトについて。ここでは一般論として「遊び心の必要性」と「詰め込みを避ける」の二つを挙げておきます。

足りぬもの。学問、研究、人事、あるいは大学行政とは全く無縁の個人的な話つまり自由なエッセーが息抜きの場として是非欲しい。そのためには、「エッセーとはこんなもの」と学内にモデルを示し得るような文章家、書き手の連載をしばらく続けるのも方策だと思います。

☆第四号に関する印象や感想など

フェニックスフェスタ特集は時宜を得ている。構成内容が良かったと思う。なかでも、石田氏の寄稿した特別記念講演案内「アウシュヴィッツとヒロシマに人類共生の教訓を見る」は格好のガイドで、大学人にないソフトな文章と問題点の指摘が楽しかった。

「大学祭を斬る」も狙いはいい。ただ、「最近の学生層における無気力」さの突っ込んだ分析がなされるべきだし、「地域や教職員の方々との交流」も論の段階はだれでも知っている。その方法が示されるべきだった。また、対談者の顔写真とプロフィールは必掲ものと思うが…。

以下、やぶにらみの疑問、もしくは問題点。

「学長インタビュー」の「統一された大学、懐かしい大学、思う心を醸成する大学」のコンセプトは共通認識となっているのであろうが、学長のインタビューだけで判断するといかにも唐突。分かりにくい。

シンポ「アジアの時代と日本」は、「なぜ、今アジアか」について書いてほしかった。また、学術論文ではないので二ページ程度の文章に。経緯、シンポジウムの狙いと内容などの項目は不要。読む意欲を失う。

スピーチコンテストの見出し「一位五万円、二位三万円…」は下品な感じ。

最後に目次の位置。特集ということで奇を衒いすぎたのでは。

☆第五号に関する印象や感想など

編集後記によると、期せずして「教育あれこれ」特集になったと書いておられた。学部教育改革の動きを反映しておもしろく読みました。「医学部の早期体験実習」「大学教育の視点」「教育実習についての私見」など、教えられるところが多かった。

二つ目は、シュミット氏の講演をきっちりフォローしたことがいい。講演を聞いた人も聞かなかった人も、改めて読むに耐え得る話だったと思います。

三つ目は、新設の「二千字の世界」が目を引きました。堅い印象の「フォーラム」にあってオアシスの役目が期待されます。是非、引き続いて、こんなエッセー・ライターを発掘してほしい。

編集後記

◆年が明けてまもなく、修士論文や卒業論文の提出を皮切りに、慌ただしい季節が始まる。行き帰りの電車のなかでも、真新しい製本の論文に目を通す教官の姿が認められる。

この季節は、同時に別れの季節の始まりでもある。やがて退職者や卒業生との別れの日がやってくる。今号の特集は「退職者は語る」。

◆特集のリード文を書きながら、退職される方々の氏名一覧に目をやった。これまで出会いを得た方々の名前を見い出して、懐かしさや寂しさの入り混じった複雑な思いにとらわれた。

文章を読む。ある方は「老兵消えゆく」と語り、ある方は「広島大学ありがとう」とつづる。なぜか熱いものがこみ上げて、リード文を書く手が止まった。別れに贈る言葉はむずかしい。「お元気で」などとは言えなくなる。言うとすればただ一つ、「ありがとうございました」。

◆退職者の方々にも関わる二つの計画が進行中だ。

一つは、現在ほぼ学内限定になっている「フォーラム」を、卒業生や学外の希望者にも配布できる道を探っていること。まだ議論の段階だが、これが実現できれば、退職者の方々にも「フォーラム」をとおして本学を見守っていただけることになる。

もう一つは、「フォーラム」ホーム・ページの準備を進めていること。インターネット上で全国どこからでも「フォーラム」にアクセスできるよう計画している。いまのところ未公開だが、できれば来年度中に一般公開できるよう努力したい。

◆ついでにもう一つ。昨年設けた「名誉教授だより」というシリーズを、今後は「退職者だより」に拡張する。退職者の皆さんのお便りを首を長くしてお待ちしている。

では、次号までしばしサヨナラ。

(第27期広報委員会委員長　越智　貢)